

一日の始まりを告げる柔らかな日差しがカーテンの隙間から差し込んでくる。

日差しはこの部屋の住人、ディーノの透けるような金色の髪を照らし眠りからの覚醒を促す。

「ん……………」

少しずつ意識が浮上してくるが、僅かに身動くだけでディーノはまだ微睡みの中を揺蕩っていた。

いつも時間に余裕を持って起こしに来てくれるロマーリオがいるからか、ディーノは毎朝この心地良い微睡みの時間を楽しんでいるのだ。

「ん…………ん、う…………う〜」

覚醒しきれない頭のまま毛布を手繰り寄せ、そのふわふわな表面に頬擦りしようとして下半身に妙な重みを感じ、爽やかな朝には似つかわしくない呻き声を漏らす。

（何か下の方が…………重い…………）

寝惚けながらも軽い圧迫感と寝苦しさを感じ眉を寄せた。

（昨夜はロマト一緒にじゃないから何もなかったし、エッチした後のダルさとは違う。股間がピンポイントに重い…………それにあったかい）

セックスの後の気だるさとは違い、何かが押し掛かっているように股間が重く人肌の温もりを感じる。

（まるで…………股間の上に誰かいるような…………）

股間…………誰か…………!?）

ここでようやく眠りから意識が完全に覚醒したのか、ディーノは目を見開くとその身から毛布をガバッと剥がした。

上は裸、下はミリタリーパンツ一枚の姿で寝ていたディーノの足の間には、白の薄い絹のネグリジェを着た少女が丸まって気持ちよさそうに寝息を立てている。

「んっ…………ん〜」

ディーノを十歳ほど若くしたようなその金髪の少女はいきなり毛布を剥ぎ取られ寒さにぶるぶる身を震わせると、温もりを求めてか寝惚けたまま朝の生理現象でミリタリーパンツの布を押し上げている股間に頬をスリスリと摺り寄せた。

「あっ…………ヤベ…………」

寝起きのところに不意打ちで股間に柔らかな刺激を受け、自分の意思とは裏腹にソコは生理現象とは別の反応を見せ始めてしまう。